

## ビュンビュンごまを回すための保育プログラムの効果

研	攻	一	幼児教育科
縄	加	奈	羽陽学園短期大学附属鈴川幼稚園
佐	藤	真	羽陽学園短期大学附属鈴川幼稚園
須	貝	弘	羽陽学園短期大学附属鈴川幼稚園

(2012年10月1日受理)

### 〔 要 約 〕

技術的能力を幼児に習得させる事例として、できないと思われる4歳児にビュンビュンごまを回せるようにするための保育プログラムの効果を検討した。

その際、保育プログラムの効果を検討するために3群を構成し、①直接指導しない群 ②全過程全てを指導する群 ③リズムカルに風糸を引くように指導する群で、その効果を見た。その結果、次のような結果が得られた。

- (1) 4歳児でも半分弱はビュンビュンごまを回せるようになった。
- (2) 3条件については、条件がクロスして条件別の効果は検証されなかった。
- (3) 幼児の好奇心を持続させるための保育をすることが、幼児の技術的能力を育てることに効果がある。

### I. 問題

幼児教育では、子どもたちの好奇心を育て動機づけを高めたり、友だちとの交流を通してコミュニケーション能力を育てたりすること等が目指されている。幼稚園教育要領には、こうした能力を「生きる力」という思想で示されている。

ところで、最近の幼児教育の現状を見ると、平成19年度から幼保一元化と言われる「認定子ども園」が始まったが、平成23年度には2000件を想定していたにも拘らず、24年度4月時点で911件に留まっている。その原因の1つは、文部科学省と厚生労働省の二重行政によるものと言われている。それに対して、民主党の幼保一体化の総合施設「こども園」構想は、社会保障と税の一体改革法案の民主党と自民・公明党との三党合意で、小宮山厚生労働大臣が早々と撤回するという事態になっている。<sup>1)</sup> この総合施設「こども園」構想には、都市部の待機児童の解消や、文部科学省と厚生労働省の二重行政を一元化すると共に、補助金などの一括管理や拠出することがあったようである。自民党案である「認定子ども園」を基にして、二重行政の修正や補助金の一括管理と拠出などを行う修正案の提出となった。<sup>2)</sup>

こうした社会状況の変化の中で、従前は幼稚園教育要領にのみあった教育部分(専門5領域)が、保育所保育指針の中にも見られるようになり、幼稚園でも預かり保育をするようになり、幼稚園と保育所の機能が

重なるようになってきた。

また幼稚園や保育所と小学校との連携が問題になり、小一プロブレムといわれる幼稚園や保育所から小学校への壁を乗り越えられない子どもたちが出てきている。こうした幼保小連携についても幼稚園教育要領に記載されており、幼保小を円滑に繋ぐ在り方を迫られている。こうした社会状況の変化と幼保小連携に伴う問題を解決するには、単なる形式的に対応を変えるだけでは、難しいのではないかと考えられる。

幼児たちにどんな能力を育てるかという問題に対処するには、幼稚園や保育所から小中学校に繋がる基本的な能力の形成を考えなければならないのと、同時に保育者自身がそうした保育の在り方を意識化した上で保育実践していかなければならないのではないだろうか。

幼児たちは五感全体で思考し学習するのが基本であることから、遊びながら能力を育てなければならない。幼児の能力を育てる際に、研は2つの保育目標があると述べている。<sup>3)</sup> 1つは、科学的な基礎概念の習得やはさみを使うなどの技術習得という幼児の個性の違いがありながら、ある考え方やある技術を習得するという収斂型保育目標であり、もう1つは、幼児の個性をより个性的にする拡散型保育目標である。どちらの保育目標も大切であるが、現場では拡散型保育目標が多く求められているようである。

2つの保育目標で育てられる能力は、どちらもが幼

児が幼稚園や保育所から小中学校へ進んでいく際には必要である。本研究では、収斂型保育目標に対応する技術能力習得の1つとして、ビュンビュンごまを回す技術の習得が4歳児で可能かどうかを検討する。

一般的に技術習得とビュンビュンごまが回せるかについて、次のような問題がある。

- (1) 技術習得の指導では、言語的な指示だけで、幼児に技術を身につけさせることは至難の業だと考えられる。中高校生であれば、自分の技術のレパートリーがある程度あり、どんな技術のレパートリーを選ぶかを言語的に指示することで技術の習得が可能なる場合もあると考えられるが、幼児ではそうしたことは難しいと予想される。
- (2) 教職科目「指導法の研究」の課題で、実習の際に「ビュンビュンごま回し」の実習実践を行った学生がいるが、年長児（5歳児）では、たまに回せる子がいるが、それも家で練習して回せるようになった場合が数例見られたに過ぎない。学生たちにビュンビュンごまを作成させ回させてみると、回せる学生と回せない学生がいる。年齢が上がりれば誰でも回せるわけではなく、回す技術習得の如何によって回せるかどうか分かると考えた方がよいようである。そう考えると、4歳児ではほとんどの幼児が回せないと予想できるが、彼らにどうしたら回せるように指導できるかという問題である。
- (3) 幼児の遊びを中心にする事と、長期的な展望にたって保育プログラムを考えて実施する事とは矛盾しないと考えられる。これまで幼児の遊びを尊重するという、幼児の好奇心があるときだけの一過性の遊びに終始して、必要な技術を学ばせていなかった可能性があるのではないかとも思う。そのことを踏まえての1ヶ月余りにわたる保育プログラムの効果を検討する。

研らによるハトポッコ体操の困難部分の克服についての保育プログラムの効果の検討でも、<sup>4)</sup> 1ヶ月余りの保育プログラムを実施して幼児たちの能力が向上した結果から見て、今回も基本的な保育プログラムを構成し、それを修正しながら実施していけば、4歳児でもビュンビュンごまを回せるようになるのではないかと考えられる。

ところで、ビュンビュンごまとは5センチ四方の工作用紙（2枚を貼りあわせたもの）の中心を挟んで、2点に穴を開け、それに尻糸を通して、その糸の端を結ぶ。それを何回か振じて、回転させる遊びである。（多くの読者は、ボタンの穴に糸を通して遊んだ経験があるのではないだろうか）

本研究で実施する保育プログラムは、上述のように

1ヶ月余りにわたる日常の保育活動の中で行われるもので、厳密な条件統制は不可能であること、プログラムはその都度改善させながら行うという保育プログラムの構成であり、比較群を置いた実験の形であるが、結果的には構成法的な手法と言って良いものである。

## II. 方法

1. 期間 1/23～3/16（5週間程度）（1/30～2/4 インフルエンザで学級閉鎖）

2. ビュンビュンごま課題

(1) 事前調査：こまを回転させるまでの6操作を課題（段階課題）とする。その程度を調査する。

- ①糸に指をひっかける
- ②両腕で糸をピンと張れる
- ③糸をくると回して、糸を振じる
- ④糸を引くことができる
- ⑤糸を引いて回転を持続できる
- ⑥リズムカルに糸を引き続けることができる

(2) 事後調査：保育プログラム後、段階課題の調査を行う。

(3) 調査方法：2～3人ずつ個別に呼び、ビュンビュンごまを見せる。保育者が見本を示し、①～⑥の段階課題ができるかを調査した。

3. 各保育プログラム群（4歳児）

年中児（4歳児）の3クラスを、それぞれA、B、C群に割り当てた。

- ①A群 直接指導しない群25名
- ②B群 全過程を全て指導する群24名
- ③C群 リズミカルに尻糸を引く部分を特に指導する群25名

4. 各群の保育プログラム構成

各群のプログラムは基本的な保育方針であり、時間経過で修正しながら実施する。

(1) プログラム実施前の幼児の様子（1月24日～25日）

1) 事前調査と提示

- 23日 事前調査実施
- 24日～25日 遊びのコーナーに2、3個提示する。

2) 各群のこまを提示したときの反応

- A群 新しいことに好奇心旺盛な幼児たち。机の周りに集まり（10人以上）、保育者がいなくても、コマに触ったり自己流で回してみる幼児が多い。「どう回すの？」と方法を聞きに来る幼児が多かった。
- B群 6、7人は手にし、回してみるなど興味を持つ様子があった。
- C群 全くコマの周辺には集まらない。少し気にする様子はあるが、実際に手にしようとはしない。

(2) ビュンビュンごま作り (1月26日～27日)

3群一斉活動でこま製作を行う。(模様づけ) ボール紙に発色の良いマーカーペンを指定。特に指導や声掛けはせず、幼児たちに自由に描かせた。「ビュンビュンごま」が完成。自分の工具箱に置いて、出し入れ自由にする。

III. 仮説

- (1) 意図的な保育プログラムの実施によって、3群とも幼児たちはビュンビュンごまを回せるようになるだろう。
- (2) 3群のうち、B、C群がA群に比べて、回せる割合は増えるだろう。

IV. 保育プログラムの実施内容

1. 保育者の保育と幼児の反応

(1) (2月6日～8日)

<p>●A群 保育者：特に何もせず、幼児のこまへの誘いかけもしないで観察。</p> <p>↓</p> <p>自分のこまを持てたことで喜び、ほとんどの幼児が、すすんで手に取り挑戦していた。 「先生、どうするの？」と盛んに聞いてくる子が多かった。保育者は方法を特に知らせず、「どうすると回せるんだろうね？」と知らんぷりをしたり、1回、2回程度、実際に回して見せた。回す時も方法を知らせず、「こうするんだよ」と黙って回すようにした。</p>
<p>●B群 保育者：一斉活動の中で、幼児たちにこまを持たせ、①～⑥の技術を教える。</p> <p>↓</p> <p>男児2、3人。すすんで遊びの中で挑戦する姿があった。挑戦する幼児には、保育者は手を取りながら回し方を指導する。また、こまに挑戦するよう積極的に声掛けや誘いかけを行う。</p>
<p>●C群 保育者：一斉活動の中で、幼児たちにこまを持たせ、①～⑥の技術を教える。その後、毎日の帰りの会ときに持たせ、♪「幸せなら手をたたこう」に合わせ、⑤⑥の技術習得を目指した。幸せなら手をたたこう♪ ⇒ 風糸をねじる パンパン⇒ 風糸を引っ張る</p> <p>↓</p> <p>やはり、遊びの中ですすんで自分のこまを持つ幼児はいない。</p> <p>↓</p> <p>保育者は「やってみようよ」と、幼児に積極的に声掛けをする。</p>

3日間、挑戦する人数は、A群が一番多い。次はB群、C群はなかなか取り組まない。

(2) (2月15日～17日)

<p>●A群 3日間ずっと継続して挑戦していたK男。1日20分程度は必ず行っていた。3日目に回せるようになった。 ☆3日間のK男の様子 ひもを10回以上ねじる。そして勢いよく引っ張る。この繰り返しを集中して行っていた。保育者は、ひもをねじり過ぎではないかと感じたが、助言せず見守った。</p>
<p>●B群 回ったK男を担任全員で、たくさんの幼児の前でほめた。</p> <p>↓</p> <p>回せる幼児が出たことで、挑戦する幼児が増えた。毎日、10人前後は挑戦するようになった。保育者は繰り返し、全過程を指導し、実際に回して見せるなどした。</p>
<p>●C群 回ったK男を担任全員で、たくさんの幼児の前でほめた。</p> <p>↓</p> <p>すすんで挑戦する幼児が数人、ようやく出始めた。保育者は、歌のリズムを口ずさみながら、⑤⑥の過程を実際に行ったり指導した。</p>

(3) (2月20日～2月25日)

<p>●A群 K男は回せるようになったことが嬉しく、遊び時間、ずっとこまをしている。その様子を男児がみていて、K男が教えるようになった。すると、男児3名、女児2名が続けて回せるようになった。</p> <p>↓</p> <p>しかし、週の後半には、すすんで挑戦する幼児が減ってきた。</p>
<p>●B群 熱心に挑戦する幼児が増えてきた。その人数は、3クラスで一番。ずっと継続的に取り組んでいた。U男が回せるようになった。</p> <p>↓</p> <p>男児4名、女児2名が、すぐに回せるようになった。</p>
<p>●C群 保育者は、もっと効果を高めることと、興味を継続させるために歌を替えた。教育テレビで幼児たちに親しみのある「にほんごで遊ぼう」の曲にした。しかし、あまり幼児は乗ってこない。</p> <p>↓</p> <p>このリズムには関係なく、手先の器用で運動能力が日頃から高いS子が回せるようになった。この頃から、挑戦する人数が増え始めた。この週の後半に2名回せるようになった。</p>

(4) (2月27日～3月3日)

どのクラスも、ビュンビュンごまをする幼児が減少してきた。回せる幼児も手にすることが少なくなってきた。そこで意欲を継続するために、回せるようになった幼児を集会で紹介したり、名前を書いて目につ

く廊下に貼るなどした。

<p>●A群 また挑戦する幼児が増え、教え合う姿もまた見られるようになった。 ↓ 保育者は、指導はしないが全く手にしようとしないうつらに誘いかけることを始めた。</p>
<p>●B群 また挑戦する幼児が増え、回せる幼児が増えてきた。 ↓ 保育者は、全く手にしようとしないうつらに声をかけ、指導した。特に凧糸を引くタイミングに重点をおく指導を行う。(前半の部分は、全員できていたため)</p>
<p>●C群 挑戦する幼児の人数は、3クラスで一番多くなった。回せる幼児も増えてきた。 ↓ 保育者は、ビュンビュンごまを回すタイミングにあった自作の曲に替え、また帰りの会に継続して全員で挑戦させた。 ↓ これまでの曲の中で一番幼児たちに浸透した。遊びの中でも、口ずさみながら回す幼児が多い。リズムカルに凧糸を引けるようになり、効果的だった。回せる幼児も増えた。</p>

(5) (3月5日～16日で終了)

## V. 結果

### 1. 事前と事後の結果

表1 事前と事後の正反応率の平均値

	群	人数	平均値	標準偏差
事前結果	A群	25	3.40	0.87
	B群	24	3.67	0.76
	C群	25	3.36	0.91
事後結果	A群	25	4.88	1.17
	B群	24	4.92	1.25
	C群	25	4.52	1.50

各段階を各1点として、全正反応を6点として、その平均値を示したのが表1である。

事前と事後の3群間の平均値の差には有意差は見られなかった。また、各群の事前から事後への平均値の差の検定では3群共に有意差が見られた。(A群  $t=6.385$   $df=24$   $p<0.00$  B群  $t=5.000$   $df=23$   $p<0.00$  C群  $t=3.965$   $df=24$   $p<0.001$ )

これらのことから、事前から事後にかけて幼児たちは、正反応に近づくような学習をしていることが見て取れる。しかし、今回の保育プログラムが、各群の特性に合わせた効果を持っているとは言えない結果となって

いる。

### 2. 各段階からの正反応への伸び数

表2 各段階からの正反応への伸び数

	事前から事後への変化			
	変化なし	②以下から正反応	③④から正反応	計
A群	13	2	10	25
	52.0%	8.0%	40.0%	100%
B群	14	2	8	24
	58.3%	8.3%	33.30%	100
C群	14	3	8	25
	56.0%	12.0%	32.0%	100

そこで、各段階から正反応への伸び数を示したものが表2である。

3群間の反応傾向には差はなかった。保育効果がなかったものは、各群でほぼ半数以上であり、効果があったものでは、③④からのものが30～40%となっているが、②以下のものは10%前後と少なくなっている。(3群間の反応傾向について、 $\chi^2$ 検定での差はなかった)

### 3. 各段階での正反応率(⑥の段階)の割合

表3 各段階での正反応率(⑥の段階)の割合

	事前の反応	伸び数(%)		計
		正反応になった	ならなかった	
A群	②以下	2	4	6
		33.3%	66.7%	100%
	③④	10	9	19
		52.6%	47.4%	100%
B群	②以下	2	2	4
		50.0%	50.0%	100%
	③④	8	12	20
		40.0%	60.0%	100%
C群	②以下	3	4	7
		42.9%	57.1%	100%
	③④	8	10	18
		44.4%	55.6%	100%

そこで、もともと事前調査での②以下と③④の反応数が異なると予想されることから、その各段階課題の分布を調べたものが表3である。それによると、各段階課題から正反応に至る割合には、余り大きな違いは見られない。段階課題の上位のものが正反応になる確率は高いのではないかと考えていたが、こうしたこと

はこの段階課題では見られなかった。

4. 事前から事後への群別の反応移行結果

各群の事前から事後への変化（人数）をみたのが表4-1、4-2、4-3である。

表4-1 A群の事前から事後への変化（人数）

事後 事前	①指を引っ張る	②両腕でピンと張る	③くるっと回して、紐を振じる	④紐を引くことができる	⑤紐を引いて回転を持続できる	⑥リズムカルに紐を引く	計
①							
②		1		3		2	6
③				3			3
④				6		10	16
⑤							
⑥							
計		1		12		12	25

現状のまま	伸びたもの	そのうち⑥のもの
7	18	12

表4-2 B群の事前から事後への変化（人数）

事後 事前	①指を引っ張る	②両腕でピンと張る	③くるっと回して、紐を振じる	④紐を引くことができる	⑤紐を引いて回転を持続できる	⑥リズムカルに紐を引く	計
①							
②							
③							
④				13		11	24
⑤							
⑥							
計							

現状のまま	伸びたもの	そのうち⑥のもの
13	11	11

表4-3 C群の事前から事後への変化（人数）

事後 事前	①指を引っ張る	②両腕でピンと張る	③くるっと回して、紐を振じる	④紐を引くことができる	⑤紐を引いて回転を持続できる	⑥リズムカルに紐を引く	計
①							
②		4				3	7
③			1			1	2
④				10		6	16
⑤							
⑥							
計						10	25

現状のまま	伸びたもの	そのうち⑥のもの
15	10	10

A群は、②から③以上に向上しているものの割合が多くなっている。ある意味では、事前の上手下手を超えて技術の習得がなされていると考えられるのに対し、B群ではこうした向上は見られず、C群では向上するものと現状のものが二極分化している。A群が全体的には効果があり、C群は効果があるものとないものに分かれ、B群では余り効果がなかったことを示している。

## 5. 各群保育者の実験後の感想

### ●A群

直接指導ができないため、意欲が継続する、楽しそうに感じられるような声掛けや関わりを大切に行った。教え合いが多く見られた。好奇心旺盛なクラスなため、意欲は出やすい。しかし、あきらめも早かったため工夫が必要だった。

### ●B群

幼児の様子を見ながら、それぞれの幼児ができない部分、苦手な部分を個別に指導することを大切にしたい。コツは尻糸を引くタイミングと考え、後半は、ここに重点を置いて指導した。熱心に挑戦し続けた人数は、3クラスで一番多かった。

### ●C群

前半、慎重で挑戦しようとしないうちの幼児が多く苦戦。試行錯誤しながら、曲を工夫したことで、後半はリズムが体にしみ込み、回せる幼児が増えた。しかし、リズムにとらわれると、なかなか効果が上がらないと感じた。

## VI. 考察

### 1. 保育プログラムの効果

保育プログラムの効果を見るために、保育指針を立ててプログラム内容を保育者の判断で変更しながらの構成だったが、事前の3群間と事後の3群間ともに差は見られなかった。しかし、事前から事後への正反応の伸びは3群ともに見られた。これらの結果は、年中児の3クラスをそれぞれ3群に割り当てて実験群としたが、日常的に幼児たちは一緒に遊んでおり、教師も他クラスの幼児を知悉しており、厳密な実験場面を構成できなかったことが結果に作用していると考えられる。

意識的に教えないA群のT男ができるようになったことを、保育者が全員の前で褒めたことで、A群内だけでなくB、C群の幼児たちに影響を与え、結果的にどの群の幼児もビュンビュンごまを回せるようになってしまった。構成法的に見れば、結果的にみんなが回せるようになれば良いのであるが、各プログラムの効

果についての検討が難しい結果となってしまった。

### 2. 正反応（回せるようになった）の割合

上述のように3群の効果に差がなく、結果が一様であったことから当然のことであるが、②と③④から、正反応に至った割合も3群間で差は見られなかった。事前から事後への変化がなかったものが5～6割となっている。②から正反応になる割合は1割弱で、③④から正反応に至るものが3～4割となっている。これらの結果から、年中児の約半分は、保育活動ややる気を起こさせる動機づけを継続的に行えば、回せるようになるということを意味している。これまでの年中児では難しいと言われていたが、工夫次第でできることが示されている。

### 3. ②と③④で正反応になる割合

②と③④の幼児が、それぞれ正反応に至る割合を見たが3群間で大きな差は見られなかった。この⑥段階課題のうち、①～④までの段階がそれほど大きな差はなく、ほとんどの幼児が④まで出来ると思われたことから、②と③④間に大きな能力の差がないと考えられる。

### 4. クラスの雰囲気と保育者の役割

この実験に入る前の各群の雰囲気が一様でなく、その結果が実験結果に反映した形となっている。A群は、もともと好奇心旺盛のクラスで、初めてのものに興味を示している。それに比べて、C群では、慎重で挑戦しようとしないうちの幼児が多い。こうした各群の特徴が結果に反映している。A群は好奇心が強いため、逆に飽きやすくなることを保育者がどのように克服するかということであり、C群は教師が好奇心を持たせて、やってみることを勧めることが役割となる。リズム感を学ばせることも、最後の方になってやっと幼児の中に内化してきた様子が見られ、その途中では逆に学習が上手いいかない傾向も見られる。B群では、6段階課題全ての指導を行っているが、やはりA群の幼児の影響を受けている。このように、各群の事前の雰囲気という特性が、ビュンビュンごまを回す指導に大きな影響があり、それぞれの群の特性に合わせた習得過程となっている。

## VII. 仮説の検討

1. 「意図的なプログラムの実施によって、3群共に幼児たちはビュンビュンごまを回せるようになるだろう」については、3群共、ほぼ半数近くが回せるようになった。これまで4歳児では回せないと考え

られていたが、保育を行えば回せることがはっきりした。仮説1は支持される。

2. 「3群のうち、B、C群がA群に比べて、回せる割合は増えるだろう」については、3群間に差は見られなかった。逆に、好奇心が強いA群の幼児が初めにできるようになり、それが他群へ波及して、どの群も回せるようになった。このことから仮説2は支持されない。

## VIII. 討論

### 1. 保育現場での実験の難しさ

今回は4歳児（年中組）を対象にして、その3クラスをそれぞれの保育プログラム群に割り当てて、その効果をみようとしたものである。しかし、保育プログラムを固定しないで、教師がその内容を工夫する余地を残せるようにしたことから、保育プログラムの基本は変更しなかったものの、幼児への保育が実験計画に沿った保育とならなかった可能性がある。

この保育内容を工夫する能力は、教師が自分の行っている保育を、幼児の反応を見ながら瞬時に変更するという意味に必要な能力ともいえるものである。あるやり方が上手くいかない時に、他の方法でやってみるということを瞬間的に判断して行うのである。こうした習性が身についた教師は、保育プログラムの基本への理解があったとしても、最初の意図とは異なる保育プログラム内容に変質させてしまう可能性がある。

またいつも殆んど一緒に活動している3クラスは、友だちも良く知っており、クラスも隣同士であることから、幼児間の情報もすぐに伝わるのが考えられる。今回の結果は、何も指導しないが好奇心が強い特性を持ったクラス（A群）のある幼児が、好奇心を持続させるだけの保育で回せるようになったこと、保育者の側がその子を他児たちの前で褒めた（紹介する）ことが、他のクラス（他の実験条件）の子どもへと波及していった。今回、実験条件を設定して効果を見ようとしたものの、保育者がどの幼児にも回せるようにさせたいという気持ちが裏目に出て、結果が交絡してしまった原因であるように考えられる。教師の保育への姿勢、保育者間の関係、幼児間の関係などが混じり合って、本来確かめたかった条件の違いをうまく抽出できないことになってしまったと考えられる。

### 2. 構成法としての保育

これまで、4歳児（年中児）ではビュンビュンごまを回せる幼児はほとんどいなかった。現場では、こうしたことから4歳児にビュンビュンごまを回すことは不可能だとか、難しいとかいう偏見があったようであ

る。しかし、今回のようにほぼ一ヶ月余りの地道で継続的な保育を行えば、50%位の子どもが回せるようになったことが示された。ビュンビュンごまの特徴は、回せたか否かがはっきりわかる保育目標であり、つまり工作目标として目標がはっきりしていることから、指導が良かったかどうかの判定についても明快である。

これら3群の保育者の働きかけは、結果からみると回せるための適切な指導が含まれていたと考えることができる。幼児に対する保育の内容が、小中学校での教育目標とは異なり、幼児の生活とかけ離れていないことから、こうした幼児の好奇心やちょっとした頑張り方を続けるようにしてやれば、技術的能力を身につけることはできるのではないのか。

幼児教育で、好奇心とか動機づけを優先することで、幼児の技術能力などを習得させるきっかけになることも本当であろう。今回のビュンビュンごまでは、こうした幼児のもともとの好奇心や動機づけそのものが効果的であったことが一部の幼児に見られたが、幼児全員でなかったことも事実である。これより高いレベルの能力の習得の場合には、どのように内容に対する好奇心を高め、できることの楽しさや達成感を期待し持続させられるような保育（働きかけ）ができるかが問題となるだろう。

### 3. どんな保育内容を考えたら良いか

問題になっている幼保小連携の問題もコンテンツフリーな思想に基づく好奇心や動機づけだけを育てる保育だけが続けたとしたら、小学校で躓く幼児が出てくることは予想できることである。本来はある内容についての好奇心や動機づけであり、それが一般性を持つには、どの位の量や質の具体的な保育内容か、それについてどのような働きかけをして、内容についてどんな好奇心を持たせ、知りたいという欲求による動機づけを強めるかを検討しなければならない。この問題は、昔から問題になっている形式的陶冶と具体的陶冶の問題にも通じるものであろう。ビュンビュンごまを回せない幼児に、技術の習得への努力と関心を持続させるためには、保育者が気長にビュンビュンごまの遊びの面白さを伝えなければならない。こうした面白さが理解し通じれば、幼児たちは好奇心を持続させ、やり遂げようとする意志の強さも示すようになるだろう。つまり、内容を無視して動機づけや好奇心は育たないのである。

研が述べているように、<sup>3)</sup> 幼児期には、上述の技術的能力以外にも科学の原体験をたくさん経験させておくことが、小学校や中学校に入ってから学習を進ませるといふ学習のスパイラルを深める可能性がある。

今回のビュンビュンごまは、幼児にとっては面白い教材であり、技術習得ができるというメリットがある。しかし、この教材が次の保育教材へと展開していくかどうかは定かでない。このビュンビュンごま教材は、保育者にとって幼児に技術習得を可能にさせるための保育条件や保育技術を学ぶためには良い教材となっており、運動学習の技術習得をさせるための指導の一例としての意味がある。しかし、ビュンビュンごま教材が、小学校の鉄棒や跳び箱同様に、閉じた世界の学習に留まって、一般化していく技術的能力の育成には弱いところがあることも確かである。また、回せなかった幼児たちに、どのような指導をしたら回せるようになるか等については、今後検討する余地があると思わ

れる。

#### 引用文献

- 1) 「情報特急便 総合子ども園法案を撤回し、認定子ども園拡充図る」全日私立広報委員会 2012. 6. 19
- 2) 「子ども・子育て3法案（修正後）、衆院可決」全私学新聞 2012. 7. 3
- 3) 研 攻一「保育実践における教材開発の問題」羽陽学園短期大学紀要 第5巻3号 1997. 2
- 4) 研 攻一、古内千寿子「ハトポッポ体操における手打ち、片足とび部分の克服について」幼稚園教育課程宮城県研究大会 1975. 6

#### SUMMARY

Kohichi TOGI,  
Kanakano NAWA,  
Masumi SATO,  
Hirona SUGAI :

#### The Effect of Teaching Program for Spinning Byun Byun Goma (top) in the Kindergarten

As the example to train a technical ability to children, this study aims to clear the effect of teaching program whether the children of 4 year old who the teachers have thought that they couldn't do that could spin the byun byun goma(top).

We construct 3 groups to study the effect of the purpose as below.

- ① The teacher don't teach directly (group A)
- ② The teacher teach all process of spin the top (group B)
- ③ The teacher teach to pull the thread of the top rhythmically(group C)

The following results were acquired;

- 1) the half of 4 year old children could spin the byun byun goma( top).
- 2) Each effect of 3 groups (condition) is not clear, because of the effects of 3 condition were crossed.
- 3) The teaching method for developing curiosity to the children could improve their technical ability.

(K.TOGI: Uyo Gakuen College. K.Nawa, M.Sato, H.Sugai: Suzukawa kindergarten attached to Uyo Gakuen College)